

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 104 号

平成22年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

相沢良一

「黒潮の神学 上巻」(黒潮社)より(7)

コリント教会

「パウロの去ったあとのコリント教会は、ギリシヤ人の常としての派閥争いが生じたのみか、姦淫事件や教会員相互の訴訟事件のほか、教会内には婦人解放運動の一現象とも見るべき頭を被わないで礼拝に出席する婦人の一群も生じ、さらには主の晩餐に際しても、露骨な貧富の対立を生じた。

これらの忌むべき数々の事柄は、コリントからエペソに来たステパナ家の奴隷ポルトナトとアカイコから耳にしたのみならず、彼らはコリントの教会からもパウロにあてて回答を求めた質問状をも携えていた。その第1は結婚の価値について、第2は異邦の祭礼への参加ならびに神殿に献げられた肉類を食することの可否、第3は霊の賜物に関してであり、第4は身体の復活についてであった。

パウロは教会の管理者、霊魂の教会者として、無比の手腕を有していた。その手腕を発揮して、非常に長い詳細な時機に適した手紙を書いた。それがコリント前書であり、さらには、後書であった。

…」

以上の叙述は、山谷省吾先生の『新約聖書解題』よりの抜き書きの一部であるが、山谷先生は、さらに次のように述べる。

「...このようにして、我々はこの手紙を通じて実際問題にぶつかり、自由に発動するパウロの生きた信仰に接する事が出来る。同時に信仰の基根がどこに会ったかを知り得る。十字架と復活、愛と奉仕を忘れた教会は、結局混乱に陥らねばならない事実をコリント教会の生きた例により学び得る。われわれにとってこの手紙は、原始教会を知りうるための資料として無比の価値を有する。...」

筆者は山谷先生のこの『新約聖書解題』を入手して以来今日まで30数年間、いまもなお、くり返しくり返し熟読しているのである。この「新約聖書解題」をとおし、新約聖書という宝の山を極める喜びを、その都度新たにしているのである。

「十字架のことばは、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには神の力である。」

「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたはもはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買い取られたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。」

「知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める。」

「主にあっては、あなたがたの労苦が無駄になることはない、あなたがたは知っているからである。」

いずれも、コリント人への第一の手紙の中に記されているパウロのことばである。

エペソ伝道

山谷省吾先生は、『基督教の起源』の中で次のように述べる。

「このようにして『アンテオケにしばらくいていてから、彼はまた出かけ、ガラテヤ及びフルギヤの地方を歴訪して、すべての弟子たちを力づけた』とある。ここからして彼の第3次伝道旅行が始まる。目的地はエペソである。

このエペソはアジア州の首都であり、政治、経済、文化の中心をなし、ローマ、アレキサンドリアに次ぐ繁栄を示し、殊に古代世界に名の響いていた女神アルテミス神殿の所在地として東方世界から崇拝者を集め、また呪術の都としても知られていた。エペソに於けるパウロの活動は2年半つづいた。その結果、東方にあって最も有力な、後々まで影響を及ぼした教会の成立を見たのである。...

このあとに次のような叙述がつづく。

「これらのことがあった後、パウロは御霊に感じて、マケドニア、アカヤをとおって、エルサレムに行く決心をした。そして言った、「わたしは、そこへ行ったのち、ぜひローマをも見なければならぬ」。そこで、自分に仕えている者の中から、テモテとエラストのふたりをまずマケドニアに送り出し、パウロ自身は、なおしばらくアジアにとどまった。」

マケドニアは、ピリピ教会、テサロニケ教会の所在する地域であり、アカヤ州の首都はコリントである。彼はこのあと、エペソからトロアスに行き、そこからヘレスポント海峡を渡り、ピリピ、テサロニケの諸教会を訪ね、さらにローマの国道を南下してコリントまで足をのばし、そこから長駆エルサレムに引返し、教会を表敬訪問した後、ローマに福音を宣べ伝えようとしたのである。

今、アジアの首都エペソにいて、彼の眼は、はるかなる帝都ローマに向けられていたのである。雄心鬱勃たる彼の伝道の志、まさに、思い見るべきではないか。

ミレト港にて

「今やわたしは御霊に迫られてエルサレムに行く。あの都で、どんな事がわたしの身にふりかかって来るか、わたしにはわからない。ただ聖霊が至るところの町々で、わたしにはっきり告げているのは、投獄と患難とが待ち受けているというということだ。しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜った、神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない。今わたしは、主とそのめぐみの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。...」

以上は、使徒行伝第 20 章の要約であるが、ルカによって記述された、パウロのこのミレトの港における別れの説教は、パウロの気持ちを伝えて余りがある。このあと、エルサレムの都で彼を待ち受けていたのは、まさに投獄であり、艱難であったのである。

昔の大島の海辺は一面の砂浜であった。昔と行っても、昭和 10 年代はじめの大島には、きれいな砂浜が残っていた。元村の沖合いに

船が停泊すると、^{はしけ} 舢舨が出迎えにゆく。^{はしけ} 舢舨から木製の棧橋を伝わって砂浜におり、道路をあがると藁屋根の古びた民家があった。入口に「日本同盟基督教会大島元村教会」という看板がかかっていた。

伊豆の伊東から大島に渡った 18 歳の自分にとっては、目に入るものすべてが珍しかった。天水を溜めておく古井戸がそうであった。椿林がそうであった。言葉がそうであった。当時の大島は、まさに牧歌的な島であった。質朴な島であった。旅人を懇ろにもてなしてくれる島であった。大正 4 年から大正 14 年までを大島の元村で過ごした歌人の槌田公平は、「帰り来てひとり悲し灯火のもとに、着物をとけば砂こぼれけり」と歌った。...こう言ってパウロは一同と共にひざまづいて祈った」とあるが、われわれもまたその都度、大島を去る人と共に、あの前浜の砂浜にひざまづいて祈ったのであった。

パウロの説教（１）

「人は言う、彼の手紙は重みがあって力強いが、会ってみると外見は弱々しく、話はつまらない」(第2コリント 10・10) これはコリント教会内の、反パウロ的人物によって発せられたパウロに対する批判の言葉である。...

パウロの病歴の研究書もないわけではないが、いずれにしてもパウロが病身であり、「外見は弱々しく」あった事は史実であると思われる。ことに第2コリントには、

「そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使いなのである。このことについて、私は3度も主に祈った。ところが、主が言われた。

「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう」(12・7 - 9)

とまで述べているのである。

コリント教会の人々がパウロに要求したものは、「巧みな知恵の言葉」ではなかったのか。しかし彼は、コリントの教会では「わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまい、と決心したからである」と、敢えて、一步も退くことをしなかったのである。...

「十字架の言葉は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である。すなわち聖書に、「わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなししいものにする」と書いてある。知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたではないか。この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にかなっている。そこで神は宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのである。...」(第1コリント 1・18 - 24)

これが使徒パウロの宣教の使信であったのである。

パウロの説教（２）

これが使徒パウロの説教であったのである。パウロの説教について、山谷省吾先生は、次のように述べる。

「パウロは霊の人であり、彼の説教の強味は、霊によって語られる者の強みであった。だから彼は、美わしい知恵の言葉によらないで、人々には愚かとしか思われぬ「十字架の言」を語ったのである。このことは同時に、彼が身をもって体験したところを如実に語ったことを示している。

彼はただ人づてに聞いたことではなく、自分の目をもって見、自分の耳によって直接に聞いたことを語ったのである。彼の論議の背後には、生きた事実が存在している。彼は十字架のキリストによって自由を獲、復活の主によって生命を与えられた。これは彼にとっては最も確実に生きた事実、何事によっても拒否されない啓示の事実である。彼の宣教は、この事実を宣べ伝えることである。乱さず、濁さず、曲げず「真心をこめて、神につかわされたものとして神のみ前で、キリストにあって語る」(第2コリント2・17)のである、これが彼の説教の特徴であった。...

この意味において、パウロの説教は伝道説教に尽きたのではない。相手の魂を主にあって獲得しなければ、止むに止まれなかったのである。

「わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。ユダヤ人には、ユダヤ人のようになった。ユダヤ人を得るためである。律法のもとにある人には、わたし自身は、律法の下にはないが、律法の下にある者のようになった。弱い人には弱い者になった。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになった。なんとかして幾人かを救うためである。福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである。(第1コリント9・19 - 23)

このような熱情が発して、パウロの説教となったのである。

パウロの説教(3)

「神はこう言われる、『わたしは恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救いの日にあなたを助けた』。見よ、今は恵みのとき、見よ、今は救いの日である」(第1コリント6・2)

さらにロマ書の中では、

「この福音は、神が預言者たちにより、聖書の中であらかじめ約束されたものであって、御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる例によれば、死人からの復活により、御力を持って紙のみ事定められた。これが私たちの主イエス・キリストである。わたしたちはその御名のために、すべての異邦人を信仰の従順に至らせるようにと、彼によって、恵みと使徒の務とを受けたのである。(ロマ1・2-5)

などが指摘されているのである。

このようなパウロ自身の教の型の中に、彼は自分の回心の体験や、伝道旅行中に出会った数々の出来ごとや、自らに負わされた使徒としての使命を織りこむことによって、彼の説教の内容が、いかに豊富にされたか、又聞く者にどれだけ福音を受け入れやすくしたかは、想像に難くないのである。

お互い、説教をわかりやすくするために、用いられるものに「例話」なるものがある。しかし、このような「例話」も、実際に自分自身が見聞いたもの、さらには自らが経験したものでなければ、訴える力に乏しいことは、申すまでもない。

パウロはピリピ書の中で「さて、兄弟たちよ。私の身に起こった事が、むしろ福音の前進のために役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい」(1の12)と述べているように、パウロの身に起こったことは、ことごとく福音の前進のために、さらには、彼の説教のために、どんなに大きな力となったことであろうか。

まさに「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにしてくださることを、私たちは知っている」(ロマ書8・28)とあるとおりである。

波多野精一先生

岩波文庫の波多野精一先生著『基督教の起源』は1908(明治41)年、31歳の時のものである。愛読措くあたわず、ひもとけばひもとくほどこの書物のもつ歴史的価値を感じないではおられない。もし岩波文庫の1冊をあげよと言われるならば、筆者はちゅうちょなく、この『基督教の起源』を推すにやぶさかではない。

この『基督教の起源』におさめられている『パウロ』について、解説者(松村克己)は次のように述べる。

「『パウロ』は、1928(昭和3)年、岩波講座「世界思潮」のため執筆された文章である。小冊ながら珠玉の文章という趣きがあり、山谷博士は「波多野の回心の作と言ってよかろう」と波多野全集第4巻の解説の中で述べており、「パウロは波多野の最も愛好する人物」とも語られている。…基督教の起源をその中核において捉えようとする試みは、具体的には新約聖書という文献において直接し得るパウロの宗教体験に迫るという道によるほかなく…今日の常識ともなっている原始キリスト教研究の方法と構成とは、すでに早く波多野によって80年の昔に『基督教の起源』において敷かれたレールであった。」(1979・4)

波多野精一博士による『パウロ』は、次のことばで終わっている。「パウロの思想を人類の歴史に結びつける時、万民のあまねき救いがその必然的結果であるはいうまでもない。すべてのものは神より出で神によって成り、ついに神に帰する如く、神の恵みは民族や人種の差別を超越し…あまねく人類の全体に行き渡るであろう。

一切が神の聖なる愛と全能なる恵みとに取り上げられ、取り容れられ、貫かれ同化されて、個人の歴史も人類の歴史も流れて一に合しつつ、時と永遠と、また現実と理想との完全なる一致が成就され、かくて完全なる聖化・絶対的なる完成が実現されることこそパウロの確信でありまた予感であった。」

パウロの手紙

山谷省吾先生は、『基督教の起源』の中で、パウロの手紙について、次のように述べておられる。...

「パウロの手紙は、ピレモン書を除き、すべて教会にあてられており、教会の集会で会員たちの前で朗読されることが予想されている。(コロサイ書 4・16)

それは手紙の文体が朗読調であり、議論の進め方も多勢を相手とした論争風のところが多いのでも知られるであろう。そして、このことはパウロがただその時限りの事柄だけを問題としたのではなく、後まで支配すべき福音の真理と規範性とを予想して書いたために外ならない。...

パウロは自分で手紙を書いたのではなく、傍にいる弟子に口述して書きとらせたのである。ロマ書 16・22 に「この手紙を筆記したわたしテルテオも、主にあってあなたがたにあいさつの言葉をおくる」とあるので、この手紙の筆記者がテルテオであったことがわかる。

手紙のある部分は、パウロの直筆で書かれている。テサロニケ後書 3・17、コリント前書 16・21 には、「ここでパウロが手ずからあいさつをしるす」とあり、ガラテヤ書 6・11 には「ごらんなさい。わたし自身いま筆をとって、こんなに大きい字で、あなたがたに書いていることを」と記している。おそらくパウロの親しみのある、上手でない大きい文字が踊るように紙面に書かれていたであろう。」

ずいぶん長く山谷先生の所論を引用させて頂いたが、さいごのパウロの文字についての先生の論述は、パウロの面目を彷彿とさせて余りがある。筆者の手紙の字も、読む方々に迷惑のかけどおしである。もっとゆっくりと丁寧に書けばと思いつつも、ゆっくりと書く時間的余裕がない。...

「手紙を通して、パウロは自分の何であるかを、もっともよく表している。彼は小事といえどもゆるがせにせず、全力を打ち込んで目的に進む人であった。...」(『基督教の起源』)

コリント前書

山谷省吾先生の『新約聖書解題』より引用させていただく。

「われわれにとってこの手紙は、原始教会を知るための資料として無比の価値を有する。イエスの福音がギリシヤの地においていかに働き、どのような効果を現わしたか、いかに多くの難問がその道に横たわり、使徒の賢明な解決策がどのように授けられたか、これらを知ることによって原始キリスト教の歴史に、一層の光明が投ぜられることになる。…」

このコリント前書は、ロマ書と並び 16 章より成り、口語訳聖書では 22 ページに及ぶ長文の手紙であり、その第 13 章は『愛の讃歌』として人口に膾炙している。

わけても「愛はすべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」(7 節)にまさる愛の定義はない。十字架の主イエス・キリストは、かかる者を忍び信じ、望み、たえていてくださるのである。

「兄弟たちよ。わたしはこのことを言うておく。肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない。ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終わりのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。

なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬ者は必ず死なないものを着ることになるのである。この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。

『死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、お前のとげは、どこにあるのか』。…

だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである。」(15.50 - 58)

コリント後書

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。…」(1・3 - 7)

「だから、わたしたちは落胆しない。たとえわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。

わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることをわたしたちは知っている」(4・16 - 5・1)

「そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと、3度も主に祈った。ところが、主が言われた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』。

それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。」(12・7 - 10)

かくて、使徒パウロは、コリントの教会にこのような第2の手紙を書き送った彼のさいごの言葉は、「わたしたちは、真理に逆らっては何をする力もなく、真理にしたがえば力がある」(13・8)であったのである。

ロマ書

「まず第1に、わたしは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられていることを、イエス・キリストによって、あなたがた一同のために、わたしの神に感謝する。わたしは、祈りのたびごとに絶えずあなたがたを覚え、いつかは御旨にかなって道が開かれ、どうにかして、あなたがたの所に行けるようにと願っている。...わたしは、あなたがたに会うことを熱望している。あなたがたに霊の賜物を幾分でも分け与えて、力づけられたいからである。それは、あなたがたの中にいて、あなたがたとわたしのお互の信仰によって、共に励ましあうためにほかならない。...私には、ギリシヤ人にも未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果たすべき責任がある。そこで、わたしとしての切なる願いは、ローマにいるあなたがたにも、福音を宣べ伝えることなのである。わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである。(1・8 18)

このロマ書冒頭に記されている使徒パウロのあいさつの中に、ロマ書執筆事情とその本質とがいかんなく記されているのである。以下は山谷省吾先生の『新約聖書解題』よりの引用である。

「パウロ自身の建設にかかわらない、従って関係の密接とは言い難いロマ教会に宛てて何故パウロは手紙を書いたのであるか...

コリント教会との紛争も和解を見、彼は今や異邦人諸教会からの約束の拠金を携え、諸教会の代表を率いて、エルサレムに上ろうと用意している。この場所はコリントであるが、冬の難航期を目前に控え、春の過越祭まで3カ月この地に滞在せねばならない(使徒行伝20の1以下)。

この3カ月の休養期間は、しかし同時に爾後の伝道企画の期間でもあった。というのは帝国の西部のラテンの世界は、早くからパウロの着眼した伝道地であって、福音をロマに伝え、さらに地の果てなるイスパニヤまで広めること、特にロマを見ること(使徒行伝19・

21)は、彼の念願であった。そのためにぜひ関係をつけておく必要のあったには 로마の教会であった。……。かかる点からみて 로마書は、使徒的外交文書ということができよう。」

「帝都の真中に正しい福音を伝えるべき機会がまさに与えられようとしている。この機会を生かし神の要求に応ずるのがパウロの義務である。この精神と意図とが 로마書の中に看取される。 로마書が他の手紙と異なる特色を持っているのは、まさしくこのような事情による。以上の叙述により、 로마書の書かれた場所がコリントであり、その時は56年12月頃であることがわかる。…」

「 로마書はパウロの手紙の中でもっとも集中的・組織的に彼の福音を祖述したものであって、いわゆるパウロ主義の全貌がそこに示されている。このことは既述のように 로마書が未知の教会に宛てて特殊の目的をもって書かれた事情に起因する。

この福音真理の客観的・組織的な叙述であることによって、 로마書は高く評価され、その生きた深い神学思想のゆえに、後の世界に多大の影響を与えることができた。教会史上の新運動は、 로마書と結びついていることが多い。聖書の力は 로마書において最も強く発揮されている。」「彼が平素教会で語った福音の説教が多くそこに取り入れられ、系統づけられたものであって、聖書によって語っているが、彼の練られた神学思想をそこに見ることができる。 로마教会の人々を眼前の聴衆として彼らに試みた神学的説教が 로마書であると言っても差し支えないと思う」。

筆者自身、若き日、牧師になる決心をしたのは「神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る」(文語訳)との 로마書8章28節であり、さらに牧師としてわが大島元村教会に赴任する際に与えられたもの「勤めて怠らず、心を熱くし、主につかへ」(文語訳)との 로마書12章11節であったのである。

ピリピ書

「紀元 49 年に小アジアのトロアスから船出したパウロの一行シラスとテモテとルカとは、ネアポリスに上陸してピリピに入り、ここに欧州最初の教会の設立に成功したのである。ここには他の教会に見るようなユダヤ人の会堂が存在しなかったので、パウロはガンギデス河畔にあるユダヤ人の礼拝所に赴いて説教を試み、この場所を足場として福音を宣伝し、ルデヤという富める婦人の入信を得た。このルデヤの家を中心として成立したのがピリピ教会であった。…」以上は山谷省吾先生の『新約聖書解題』の中よりの抜き書きである。...ピリピ書は短い手紙ではあるが、そこには信仰の喜びと救いの感激が殉教の憧れと結びついて語られ、さらにパウロの深い宗教体験がにじみ出ている。...ことに第 3 章 5 節以下は、使徒パウロを知るための最も貴重な資料として、特筆大書さるべき箇所でもある。

「すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである。わたしがそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標をみざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」(3・5 - 14)

お互い自分を見れば、嫌悪を感じ、時には絶望の淵に陥らざるを得ない。このような生の深き現実の中において、なおかつ喜びと感謝をもって生きることをゆるされているのは、まさに「信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見出す」ようにされたからではないのか。「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神のよしとされるところだからである」(2 の 13)は、筆者特愛の 1 節である。...